

テンペラ

●特徴

- ・水溶性、乾くと耐水性。非常に速乾性。
- ・速乾性。ぼかしはハッチングによる細密描写がしやすい。
(油性分を加えることより、絵具の伸びが自由に、ぼかしやグレースも可能になる。)
- ・油成分の混合比により (50%以上 100%未満) 油絵具との併用が可能となる。
- ・乾燥すると、非常に硬質・堅牢。鮮明で深い。下層の影響大。重色効果。
- ・厚塗りができない。厚いと亀裂する。計画的描画が必要。
- ・下地は石膏地や白亜地など硬質なもの。

●メディウム (今回は卵+油性分のテンペラガラスサ)

- * 卵黄 (表面の薄皮を取り除いたもの) … 1個
- * オイル (スタンドオイル2 : ダンマルワニ … ティースプーン 1~2杯
- * 酢 (or 防腐剤) … ティースプーン 2~3杯 (防腐剤 2滴)

- ・卵を割り卵黄を取り出したら、カラザや、卵黄のうを取り除く。
- ・卵黄をかき混ぜながら、オイルを数回に分けて滴下し混ぜる。
- ・さらに酢を加え混ぜる。

※保存は冷蔵庫

●描画

- ・筆は水彩用。
- ・メディウム 1 : 顔料 1弱 + 適度な水で薄めて描画。
- ・有機顔料はエチルアルコールで湿らせてから溶くとよい。
- ・明るい部分は、各固有色に明るさの段階に応じてホワイトを加えていきながら彩色する
明暗法が基本。
- ・暗い部分は、暗色彩色や透明色を重ねることで得られる。
- ・肌身部は下地にテールベルトを薄く溶き塗る。肌の中間色はホワイト、パーミリオン、イエローオーカーで調色し陰の部分以外にハッチングで起こす。次にハイライトで描き起こし、陰の色をガラスシ。

金箔の貼り方

材料 金箔、石膏地、ボーロ、膠水（膠 1 : 水 15）

道具 ピンセット、毛筆、シッカロール、メノウ棒、綿、和紙、ハサミ、蠟燭

●制作手順

- ①石膏地に、石膏地塗料で装飾部の盛り上げをする。（※この時の塗料は、地が 1:8 の膠水なら、1:10 位の膠水で作る。上層にいくほど、地の層はやわらかい方が良い為）
- ②膠水（膠 1 : 水 15）で溶いたボーロを、薄塗り 3 層塗布する。（※金箔の下地は油絵の具でも良いが、装飾的に扱う時は、ボーロが良い。金にあたたかみを与える。）
- ③ボーロが乾いたら、メノウ棒で磨き、光沢を出す。
- ④ボーロを膠水で濡らし、金箔を貼りつける。
- ⑤乾燥後、メノウ棒で磨くことで光沢が出る。（※完全な乾燥ではなく、乾いてからすぐでないと、光沢が出ない）

●貼り方詳細

- ①金箔の上に蠟燭を塗りつけた和紙を重ねる。（※ピンセットの側面でやさしく撫でて、空気を抜き、全面張りつくようにすると、皺にならない）
- ②和紙ごとシッカロールをまぶしたハサミで適切なサイズにカットする。
- ③カットした金箔を竹箸で掴み、膠水を塗布した面に乗せる。
- ④貼り残し部に、細かく切った金箔を重ねるように貼る。
- ⑤全面に金箔を貼り終えたら、綿で上から軽く押さえる。
- ⑥乾燥した柔らかい毛筆を使い、金箔の重なり合った箇所を払い落とし、表面を整える。その際に出たバリは柔らかな綿で押さえる。
- ⑦二層目も同じ様に貼る。（※最近の金箔は極薄の為、2 枚重ねる程度が良い）
- ⑧自分が求める光沢になる程度、メノウ棒で磨く。

油絵の具の手練り

※今回は、古典的油絵の具と、現代の油絵の具の2種類、シルバーホワイトを作る。

●絵具について

構造

- ・発色性分 …顔料、染料、体質顔料 etc
- ・定着性分 …油、樹脂、ゴム etc
- ・補助成分 …分散剤、増粘剤、ph調整剤 etc

※顔料について

- ・土や石や鉱物から採る。
- ・動植物から作る。(マダー、コチニール、ガンボージ etc)
- ・焼いて作る。(木炭、焼き土 etc)
- ・化学的に作る。(コバルトブルーなど、複合酸化物顔料)

●古典的油絵の具と現代の油絵の具の違い

古典

顔料 (発色性分) … 鉱物中心

乾性油 (定着性分) … ブラックオイル

透明性

流動性

広いグラデーション

底光の発色

混色で濁りにくい

現代

顔料 (発色性分) … 化学物質中心

乾性油 (定着性分) … 生乾性油、牛脂ステアリン

(これらが現代絵画の不透明感、タッチによる質感に繋がっている)

非透明性

可塑性

狭いグラデーション

表面的発色

混色で濁りやすい

※絵具のつくりがだいぶ違うため、古典絵画を描く際は、顔料とブラックオイルから、自分で作るべき。(市販のものなら、マツダスーパーやレンブラントが透明性が高く、古典的絵の具に近い)

●用意するもの

材料

- ・古典：シルバーホワイト、ブラックオイル(黒)
- ・現代：シルバーホワイト、ステアリン酸入りリンシードオイル（黄）、炭酸カルシウム

※炭カル（体質顔料）は絵具に混ぜても色が変わらない。

シルバーホワイト吸油量→ 11ml ~15ml / 100g

道具

大理石板、ガラス練り棒、パレットナイフ、空チューブ

●制作手順

- ① 大理石の上に粉末を置き、中央にくぼみを作って、そこにオイルを少しずつ垂らしながら、パレットナイフを使ってよく混ぜ合わせる。（ミキシング）

※シルバーWは毒性があるため、顔料が飛散し、吸い込まないように注意する。

ポイント

オイルは少し足りないと思われるぐらいが適量である。この時点で既にテカテカとした艶があったり、軟らかかったりする場合は多過ぎる。必要なオイルの量は顔料によって異なる。同じ種類の顔料でも粒の大きさなどの条件が異なれば、やはり吸油量も違ってくる。加減を見つつ加えてゆくとよい。

- ② 顔料と媒剤を混ぜ合わせてペースト状になったのを確認したら、次の作業である本練りに入る。本練りは絵具に柔軟性をもたせるための重要な作業である。まず、パレットナイフを使って十分練る。
- ③ 次にガラス練り棒でしっかりと圧を加えながら、練りこんでいく。オイルが顔料を満遍なく包み込むに従い、油絵具らしい艶と粘りが出てくる。
- ④ 練り時間は顔料によって異なる。20分程度で終わる顔料もあれば、1時間練ってもまだ足りないものもある。最終的にどの時点で終わりにするかは当人の判断次第であるが、指で粘りや艶が十分であるかどうか確認し、OKならナイフを使って空チューブの中に詰めてゆく。
- ⑤ 空気を入れないように、チューブのおしりの部分を2~3回折って完成。
※しばらくの間保管しておくことにより、チューブ内で馴染んでゆく。

グリザイユ技法

●特徴

- ・基本的には、無彩色一色を用いてその濃淡の調子によって描く技法。油絵の制作プロセスにおいて、下層可描き段階に行われる。
- ・有彩色の中間トーンの下地を用いて、白色で明部を描き起こした後、いくつかの層は中間トーンの有彩色を用いて重ね塗りし、作業をやりやすくして制作する場合もある。

●制作手順

① インプリマトウーラ

キャンバスにローシェンナ、バーントシェンナを混色した油絵具を、テレピンで溶いて、薄く1層刷毛塗りする。

② グリザイユ

用いる絵具は、シルバーホワイト、アイボリー (or ピーチ) ブラック。

ポイント

- ・やや明るめのキーで大まかな明暗配置を行う。(上層の彩色の発色を良くする為)
- ・1番明るい所→白のみ、1番暗い所→白1：黒1弱。

③ 彩色

グリザイユが乾いたら、油絵の具による彩色。

ポイント

- ・暗い部分はグリザイユ層を生かす。
- ・透明、半透明、不透明に、オイルの添加具合によって使い分ける。
- ・上層にいくにしたがって、十分な油分を与えていく。

モザイク技法

・モザイクのモルタル

セメント：珪砂＝1：2 （珪砂は7号と6号半々）

これに、「hiメトローズ」（左官用モルタル混和剤）を少々。硬化スピードを遅くするもの。

・モザイクのピース ＝ テッセラ

大理石を5mm角位に割る。（ガラスモザイクはズマルトという）

・制作手順

- ① 今回は、簡単なもの→濡らした新聞紙の上に針金の格子と、縁板をセットし、水で溶いた上記セメントを流し込む。これが下地。（下地は本来、平面なら下地加工したベニヤの上にセメントを塗ったもの、立体なら発泡スチロールなどで大まかな形を作り、セメントを塗ったものでやる。）
- ② セメントが完全に乾いたら、その上からモルタルが接着しやすいよう、モルタルに混ぜるのと同じ接着剤、今回は「NSハイフレックス HF-1000」（モルタル接着増強剤）を表面に塗る。
- ③ ②が完全に乾いてからモルタルをのせられる。モルタルは上記セメントに、ハイフレックスを水で3分の1希釈したものを混ぜて、使う都度つくる。モルタルはゆるい方がテッセラをのせやすいが、ゆるすぎてハイフレックスの白さがういてくるようならあまり良くない。セメントは、使えそうでも2時間以上経ったら捨てるのが無難。
- ④ テッセラはモルタルに3分の2は埋まっていた方が安心といわれる。メジを揃え、隙間なく組み合わせたいける方が美しい。表面を削る計画があるのなら、テッセラの高さを揃えておくべきだ。
- ⑤ 1ジョルナータできたら、必ず余分なモルタルは削り落しておく。
- ⑥ 上から霧吹きでモルタルを湿らせてから乾燥させた方が、丈夫。

・その他

- ・ モルタル乾燥後の修正は、平ノミと金鋸でモザイクを削っていくしかない。
- ・ モルタルを白くしたいのなら、ホワイトセメントを使う。逆にもっと黒くしたいのなら、墨汁を入れればよい。
- ・ フレスコのモルタルでも可能だが、弱いかもしれない。ハイフレックスを多めに入れる。
- ・ セメントはあくまで硬化剤。珪砂よりセメントが多かったら割れる。

板地について

●サイズ種類

- ・ 3×6 (910 mm×1820 mm) 基本
- ・ 4×8 (1220 mm×2440 mm) 基本
- ・ M判 (1000 mm×2000 mm)
- ・ 3×7 (1820 mm×2100 mm)
- ・ 3×8 (1820 mm×2440 mm)
- ・ 4×6 (1220 mm×1820 mm)

●材質種類と特徴

ラワンベニヤ

ラワン材を、木目が垂直に交わるように重ねて接着剤で貼り合わせを施した合板。表面がかなりざらざら。

安価。

シナベニヤ

中心はラワンと同じ素材だが、表面にシナノキ材を張った合板指す。表面はとてもきめが細かくてきれい。木目はほとんどない。

ラワンより高価。

※漆喰壁を塗った際、ラワンより出てくるアクは少なかったが、結局はシナの中心もラワンなので、水を多く使って施工すればアクは出てきてしまった。純白な下地を求めるなら、シーラー加工を施す方あ良い。

●ベニヤの耐水加工について

ベニヤは何層かの木材を接着してできているため、その糊の違いで耐水かどうかが決まる。フレスコ画下地に使う際は、耐水加工してあるものを選ぶ。

※3×6サイズ(910mm×1,820mm)または、
4×8サイズ(1,220mm×2,440mm)

※寸法表示はmm単位

